

フィッシャー論争

〈第一次世界大戦と西ドイツ保守論壇〉

栄光学園 福本 淳

はじめに

高校世界史Bの授業（高三対象）で、どうやって生徒に、歴史の見方の一つではないこと、また歴史は数学のような厳密な意味での理論性はないかもしれないが、やはりある程度は理論的に思考する必要があるので伝えることができるか考察してみた。素材はフィッシャー論争。ではまず、フィッシャー論争とは何か？

あまり知名度の高い論争ではないので、まずはその紹介から。

一 フィッシャー論争とは何か

フィッシャー論争とは、ドイツ・ハンブルク大学の教授だったフリッツIIフィッシャーが第一次世界大戦におけるドイツの戦争責任をめぐって発表した学説の是非をめぐる、一九六〇年代に西ドイツにおこった激しい論争のことである。

そもそも戦後の西ドイツ歴史学界は、ナチスの侵略性や戦争犯罪を率直に認め反省する姿勢が強いことで知られ、また各国から信頼と尊敬を集めていた。しかしその一方で、西ドイツ論壇の主流は、ナチスと、それ以前のドイツ史の長い伝統とはつきりと区別していた。

「ナチスの犯罪については弁解の余地はない。大いに反省し謝罪しましょう。でもあれはドイツ史における例外的、突然変異的な現象であって、本来のドイツの伝統とはベートーヴェンやカントのような健全なものだったんですよ！」というわけだ。

では第一次世界大戦でのドイツについてはどうだったか。

ドイツは第一次世界大戦でも積極的な攻勢を仕掛け、最終的に敗れるという第二次世界大戦と似た経過をたどった。しかし第2次世界大戦とは違い、第一次世界大戦は、ドイツが一方的に悪いと言う考え方はあまりされていない。ヒトラーやナチスのような邪悪な人種主義を掲げる勢力が無かったことが大きいのだが、それ以外でも、たとえば元イギリス首相ロイドIIジョージでさえ「我々は全てずると大戦にひきずりこまれた」と言ったぐらいなのだ。

ドイツ人の多くは第一次世界大戦を、国際情勢の緊張が不可避的に爆発し、また同盟国オーストリア（厳密にはオーストリアIIハンガリーII重帝国と言うが、本稿では読みやすさを重視しオーストリアと表記する）との義理に絡まれて、やむを得ず参戦した戦争だと考え、ドイツに大きな責任はないと考えていた。だからこそナチスだけがドイツ史の唯一の例外現象なのだという理論も成り立つのだ。

ところが一九六一年、フィッシャーはそれまで散発的に発表してきた主張をまとめた大著『世界強国への道』を出版し、第一次世界大戦の勃発についてもドイツが極めて積極的な役割を果たしていると説いた。これは西ドイツ各界に大きな衝撃を与えた。第一次世界大戦もまたドイツの野望によって引き起こされたとするならば、もはやドイツ人の名誉は地に落ちてしまう。

そう考えた西ドイツ保守論壇はこの説に激しく反発を示した。

二 フィッシャーの問題提起

フィッシャーの学説は分厚い本2冊分の量を持ち、細部まで考えれば論点は多岐にわたるが、本稿では主な点に絞って紹介していこう。

〈論点一〉第一次世界大戦勃発は表面上、盟友オーストリアの始めた戦

争にドイツが巻き込まれたように見えるがそうではない。むしろドイツはサラエボ事件や、それに続く「七月危機」を好機到来とみて、積極的にオーストリアを煽動した。

そもそもドイツ軍部は軍備を増強するフランスやロシアを強く意識し、まだ仮想敵国の準備が整わないうちに戦争を開始することを強く望んでいた。たとえば、まだサラエボ事件が起きていない一九一四年五月に、ドイツ陸軍参謀総長モルトケはドイツ政府の要人と語り合ったさい、「早期開戦」を主張した。彼は翌月にはドイツ外相ヤーゴに対して「二、三年もすればロシアはその軍備を完成するだろう。その暁には諸敵国の軍事的優位は著しいものとなり、どうやってこれにうち勝つことができようか、全くわからない」と力説したという。

サラエボ事件後の具体的政治行動でもドイツの好戦的姿勢が目立つ。発生当初はまだこの事件が戦争に繋がるか否か、微妙な状況だったのに、ドイツはオーストリアを積極的に戦争へ駆り立てた。実のところオーストリアは迷っていたのである。強気を押し通しセルビアと戦争を開始すれば、セルビアと固く結束しているロシアが乗り出してくる。陸軍大ロシアとの全面戦争にはドイツの協力が欠かせない。そこでオーストリアはドイツの出兵を探った。

七月初旬、オーストリアの駐ベルリン大使のセジェーニと会見したドイツ皇ヴィルヘルム二世は、セジェーニと会談し、「重大なヨーロッパ紛争の起きた時、オーストリアはドイツの全面的支持をあてにして良い」と固く約束し、挙げ句の果てに「オーストリアが戦争を決意するなら直ちにセルビアへ進駐するように」と急かした。フィッシャー派が「白紙委任状」と呼んだ決定的な約束である。以後オーストリアは俄然強気となるのはこのせいだという。

《論点二》ドイツは単なる強国の地位に飽きたらズイギリスやロシアに匹敵する「世界強国」になるという具体的ビジョンを持って戦争を遂行した。フィッシャーが第一次世界大戦時のドイツの戦争目的を語るとき、決定的史料として使用するのは、ドイツ陸軍がパリに迫り、短期決戦が成功するかに見えた九月初旬、時のドイツ帝国宰相ベートマン・ホルヴェークがコブレンツ大本営で作成した講和条件の草稿である（いわゆるベートマン・ホルヴェークの「九月綱領」）。

その主な内容は西方の安全を確保するべくドイツとの国境地帯に近いフランス東部のベルフォール・ボージュ山岳地帯やブリエ鉱床を併合する、またフランス北部の海岸のうちダンケルク・ブローニュを併合することもあり得る。フランスをドイツの輸出市場・経済的従属地にするような通商条約を結ばせる。ベルギーの東部（特にリエージュ）はドイツに併合され、よしんば独立国の外見を保つにしてもドイツの衛星国に転落させる。ドイツはフランス、ベルギー、オランダ、デンマーク、オーストリア、ポーランド、デンマーク、スウェーデン、イタリヤ、ノルウェーと関税協定を結び中央ヨーロッパ巨大経済圏を創設・指導して世界経済における優位を確定する。またフランスやベルギーのアフリカでの植民地を奪い、アフリカ大陸中央部にドイツの巨大な植民地が建設される・・・などなど。

三 反対派の意見

こうしたフィッシャーの指摘に対して、西ドイツ保守論壇の批判は様々だった。その中には学術論争と言うよりは、感情的な誹謗中傷に近いものも多かったが、比較的冷静な批判を紹介すると、
*フィッシャーは第一次世界大戦のときのドイツと後年のナチス・ドイツとの連続性がある程度想定しているようだが、本来のドイツの

歴史的伝統とは宗教の自由であったり理性的な国家運営であったりしてナチスの狂気とは別物である。むしろ第一次世界大戦以降、そうしたドイツの健全な伝統が失われた空白に、ナチスは入り込んだのである。

*七月危機のときのドイツの行動は、戦争を引き起こそうとしたのではなく、唯一の信頼できる同盟国だったオーストリアがスラブ民族の挑戦に譲歩して衰退していくことへの当然の危惧から生じたものだ。

*九月綱領などの二、三の文章をことさら強調してフィッシャーが描き出した宰相ベートマン・ホルヴェークは、本来は優柔不断な平和主義者だった彼の人柄から大きく離れて「征服欲の野獣」「悪魔の中の悪魔」になってしまった。

*併合主義的な戦争目的を掲げていたのはドイツだけではない、全ての交戦国がそうだった。

四 フィッシャー派の再編論

これに対してフィッシャー派からは、以下のような再反論があった。

*どう言葉を言い換えようとも結局反対派の歴史家は、一九一四年七月危機においてドイツがオーストリアに強く圧力をかけた事実を全く否定できていない。

*ベートマン・ホルヴェークが、本当はどんな人物で本当のところ何を望んでいたかなどは重要ではなく、彼が実際に何をしたかが重要。また彼が併合主義的な軍人や右翼に迎合せざるを得なかったドイツ社会の状況に目を向けるべき。

*他国が併合主義的だったことが直接的にドイツの潔白の根拠にはならない。

反フィッシャー派の意見にも見るべき物はあるが、総じてフィッシャーの主張を全否定できるような反証は出ておらず、またドイツ以外の国々で彼の評価が高かったこともあってフィッシャーのテーゼは次第に定着していった。タブーに挑み、学界のパラダイムを転換させたフィッシャーの勇氣と才能は高く評価されてしかるべきなのである。

五 授業への応用

栄光学園の現行カリキュラムでは、世界史の学習は中三と高一の二年間、週3時間かけて人類の出現〜第一次世界大戦ごろまでの通史を教え、高三でそれ以降の近現代史と受験対策を教える体制となっている。

高三を受け持った場合だと第一次世界大戦をあつかうのは、一年の冒頭である。そこで、まず二年前に受けた授業（かなり忘れていると考えた方がいい）を思い出させるために映像の力を借りるのがいいだろう↓**NHK映像の世紀第2集（第一次世界大戦）**が傑作なのでこれを見せる。次に受験的、網羅的な知識を学ばせるため穴埋め式の**プリントA**を配り一般的な授業を行う。それだけではつまらないので「もう少し深めてみよう」と生徒に呼びかけ、フィッシャー論争をまとめた読み物形式の**プリントB**をくばると言う手順で重層的に生徒の知識を整理し、考える力や歴史への具体的イメージを育てるのはどうだろうか？また各プリントを配布するときに適宜生徒に発問するのも良いだろう。

《参考文献》

F・フィッシャー著、村瀬興雄訳『世界強国への道（上・下）』

岩波書店、一九七二、一九八三



第1次世界大戦

教科書 P214-218 タペストリ P214-218

★戦争の勃発

1914. 6/28 _____ セルビア系のボスニア人青年プリンチップがオーストリアの皇位継承者
夫妻を暗殺。(プリンチップをはじめ暗殺犯人 8 人は青年ボスニア党という組織のメンバーで、
この組織はセルビア軍と密接な関係にあった政治結社「黒い手」とつながりがあった)

1914.7/23 オーストリアはセルビアに対して反オーストリア運動の取り締まり、サラエボ事件関係者の処罰とその
裁判へのオーストリア官吏の立ち会いなど厳しい最後通牒を突きつける
→セルビアは裁判への立ち会いを除く部分を受け入れると表明するがオーストリアは完全受諾を迫る

_____ オーストリアがセルビアに宣戦、攻撃を開始して第1次世界大戦はじまる。

1914. 7~8 月 ロシアがセルビアを、ドイツがオーストリアを支持して参戦、戦火は急激に拡大していく。イギリスも
ドイツ軍の _____ の中立侵犯に抗議し連合国(仏露)側へ参戦

★前半の戦局

ドイツ側の短期決戦計画:シュリーフェンプラン(全力でフランスを倒した後に兵力を東へ移しロシアを倒す)

1914 8 月 _____ ドイツに侵入したロシア軍が惨敗 以後、東部戦線はドイツ優位が確定。

1914 9 月 _____ ドイツ軍の早期戦略は失敗、→西部戦線は塹壕に立てこもっての長期戦へ

1915 「未回収のイタリア」を抱えたイタリアが同盟国を裏切り連合国側へ参戦する。

★戦争の性格

歴史上初の本格的な _____ 大規模な徴兵制や一般産業の軍事への転用、戦後の都市への
空襲など全国民が戦争に否応なく巻き込まれていく。また軍事的には火砲の発達による防衛の優位で戦線は膠着、
特に西部戦線は塹壕戦。戦局の打開を目指し新兵器が続々と登場(航空機、毒ガス、戦車、潜水艦)。

★西アジアの情勢

1914 10 月 オスマン帝国(トルコ)はドイツ側(同盟国側)で参戦する。
1915~16 英仏軍がトルコのゲリボル(ガリポリ)半島に上陸作戦→失敗。

1915 _____
イギリスはトルコ支配下のアラブ民族に叛乱を呼びかけ、見返りに戦後におけるアラブ国家建設を約束。
これを信じたアラビア半島の名門豪族フサインは反乱に踏み切る。

1916 _____ 英仏露による秘密協定。トルコの解体、三國による分割を約束。

1917 _____ 英外相バルフォアはパレスチナにユダヤ国家建設を公約、ユダヤ人の協力を要請

こうしたイギリスの二枚舌外交(二枚舌外とも言う)は、アラブ人、ユダヤ人双方に過剰な期待を抱かせ今日の
パレスチナ問題の重大な原因となった。

★東アジアの情勢

1914 日本は日英同盟を口実に対ドイツ宣戦、 _____ 半島の要地や南太平洋にあるドイツ領を制圧

1915 日本は世界の目が欧州に集中する間に東洋世へ _____ を認めさせる。
(ドイツ利権の日本への譲渡、旅順・大連の租借期間大幅延長、中国政府の軍事・政治・財政顧問として
多くの日本人を採用する等々)

1917 中華民国(軍閥割拠だが一応北京を握った段祺瑞が中国代表になっていた)が連合国側に参戦。

★戦争の経緯

優勢なイギリス海軍の海上封鎖で、物資不足に苦しみ焦り始めるドイツ。

1915 ドイツの潜水艦が英国客船(武器を運んでいたが)ルシタニア号を撃沈しアメリカ人128人が死亡

1917 ドイツの _____

↓

_____ アメリカ合衆国が対ドイツ宣戦 (戦況は一気に連合国の優位へ)

1917 ロシア革命

1918 1月 アメリカ大統領ウィルソンは講和への提言として「_____」を発表

1918 3月 ドイツとロシア革命政府が講和する(ブレスト＝リトフスク条約)。
ドイツ軍は東部戦線の兵力を西にまわして最後の攻勢をかけるが失敗。

1918 秋 ブルガリア、トルコ、オーストリアは続々と降伏。

1918 11月 キール軍港で水兵反乱 _____ が勃発。帝政崩れ社会民主党を中心とした政府が成立。

1918 11月 ドイツが休戦協定に調印、第1次世界大戦はついに終結。

★第1次世界大戦の意義

*ヨーロッパの没落 かわって米ソ日の台頭、植民地の独立運動がますます活発化。

*戦争の違法化の時代へ

あまりにも犠牲の多い戦争の経験(主要参戦国戦死者数だけで約760万人)は、戦争を外交の延長線上として許容する19世紀的思想を崩れさせ、これ以後は「戦争＝悪」とする思想が国際社会の共通認識になっていく(例:ワシントン不戦条約、国際連合憲章)

* 男子が戦場に行ったあと、工場や事務職などで活躍した女性の地位は向上し、皮肉にも戦後いくつかの国で、婦人参政権が実現



フィッシャー論争とは、1960年代の西ドイツ歴史学界におきた論争である。そもそも西ドイツは、ナチスの犯罪を率直に認め反省する姿勢が強いことで知られ、各国から信頼を集めていた。その一方で西ドイツ国民の多くは、ナチスとそれ以外のドイツ史とをはっきり区別していた。「ナチスの犯罪については大いに反省し謝罪しよう。だがナチスは長いドイツ史における例外現象であって、本来のドイツの歴史や伝統とは、カントでありベートーヴェンであり、とにかくもっと健全で誇るべきものだ」というわけだ。

では第1次世界大戦でのドイツについてはどうだったか？。ドイツは第1次世界大戦でも積極的な攻勢を仕掛け、最終的に敗れるというある意味では第2次世界大戦と似た経過をたどった。しかしドイツが一方向的に悪いと言う考え方はあまりされていない。ヒトラーやナチスのような邪悪な人種主義を掲げる勢力が無かったことが大きい。それ以外でも、たとえば第1次大戦時のイギリス首相ロイド＝ジョージでさえ回想録で「列強は全て大戦にするずるとひきずりこまれた」と言ったぐらいなのだ。ドイツ人の多くは第1次世界大戦は、国際情勢の緊張が不可避的に爆発し、また同盟国オーストリアとの義理に絡まれて、心ならずも戦争に引き込まれたと考え、ドイツに大きな責任はないと思っていたし、第2次大戦後は、ドイツをいじめすぎたヴェルサイユ体制への反省から英米仏など西側諸国もこの考えをおおむね受け入れていた。

ところが1961年、西ドイツの歴史学者フリッツ＝フィッシャーは名著『世界強国への道』を出版し、第1次世界大戦の勃発についてもドイツの攻撃的な野望が主導的な役割を果たしたと主張した。そうだとするならば、もはやナチスだけがドイツ史の例外現象ではなくなってしまふ・・・、西ドイツ保守論壇はフィッシャー説に強い反発を示した。フィッシャーの著作はかなりの分量があり、細部まで考えれば論点は多岐にわたるが、主な点に絞って紹介していこう。

① フィッシャーによればドイツは、同盟国オーストリアの戦争に引きずり込まれたのではなく、戦争勃発を望み、積極的に対立をあおった。

もともと三国協定の包囲網で苦しめられていたドイツの軍人の間では、戦争で苦境を一気に打破したいという考えが広まっていた。ロシアが日露戦争の痛手から立ち直り、軍備増強を進めていた当時、「戦争は早ければ早いほどドイツに有利だ」（サラエボ事件の一ヶ月も前、ドイツの陸軍参謀総長の言葉）というのがドイツの本音だった。

さて、サラエボ事件（6月28日）後、オーストリアは迷っていた。皇太子を殺されたのは許せないが、セルビアを攻撃すれば、ロシアがセルビアをかばって参戦する。ロシアとの全面戦争にはドイツの協力が欠かせない。そこでオーストリアはドイツの出方を探った。7月初旬、オーストリアの駐ベルリン大使セジェニと会見したドイツ皇帝ヴィルヘルム2世は「ロシアは準備不足で開戦するか悩むだろう」と楽観的な状況分析を述べ、「重大なヨーロッパ紛争の起きた時、オーストリアはドイツの全面的支持をあてにして良い」と明言し、さらには「オーストリアが戦争を決意するなら速ちにセルビアへ進駐したほうが良い」という助言までした。フィッシャーが「白紙委任状」と呼んだ決定的な約束である。感激したセジェニは「これほどの有利な瞬間を見送るならばドイツは我が国に対して遺憾の意を抱くだろう」という感想を添付して会談内容を本国政府に送った。オーストリアがやけに強気になるのはこれ以後である。

②ドイツには戦争に勝って世界的強国になろうとする明白な目的意識があった。

フィッシャーが第1次世界大戦時のドイツの戦争目的を語るとき、決定的史料として使用するのには、ドイツ陸軍がパリに肉迫したマルヌ会戦中の1914年9月初旬、時のドイツ帝国宰相ベトマン＝ホルヴェークが大本営で作成した講和条件案、いわゆる「九月綱領」である。その内容は、ドイツとの国境地帯に近いフランス東部のポーシュ山脈や鉄鉱石の産地ブリエの併合、フランス北部の海岸の港町の併合、フランスをドイツの輸出市

場・経済的従属地にするような通商条約を結ばせる、ベルギーは領土を縮小したうえでドイツの衛星国に転落させる、ドイツはフランス、ベルギー、オランダ、デンマーク、オーストリア、ポーランド、デンマーク、スウェーデン、イタリア、ノルウェーと関税協定を結び中央ヨーロッパ巨大経済圏を創設・指導する、ポーランドを独立させた上でドイツの衛星国とし、ロシアを東方に押しやって東ヨーロッパの覇権をドイツが握る、フランスやベルギーのアフリカでの植民地を奪いアフリカ大陸中央部に巨大なドイツ領を建設するなど、後年のナチスにも一脈通じる極めて野心的な内容であった。

さて、こうしたフィッシャーの説に対しての保守論議の反発は激しく多彩だった。主な論点として以下のような点があげられる。①サラエボ直後、確かにドイツは「速やかに強力な行動を」とオーストリアに要請した。だが、それは三国協商の包囲の中で苦しむドイツにとって、唯一頼りになる同盟国オーストリアがスラブ系諸民族の活動に毅然とした態度をとれないでするする弱体化していくことに対する焦りがあっただけで、ドイツは、この時点で領土拡大などの野望など抱いていなかった。②フィッシャーは九月綱領などの数点の文章を強調して宰相ベートマン=ホルヴェークを描き出すので、その人物像は、本来は穏健であり優柔不断だったこの宰相の人柄から大きく離れて「征服欲の野獣」「1914年のヒトラー」になってしまった。③宰相ベートマンは本来は温厚な平和主義者であり、軍部や右翼団体などの好戦的な世論が乗ってしなく盛り上がりすぎることを心配して、ある意味で歯止めとして九月綱領を作成した。また戦争の長期化後は和平工作にも積極的に動いている。戦争に進んで行ったドイツ帝国の内部にも、彼のような穏健な人がいて、決して一枚岩ではなかった事をこそ重視すべきだ。④野心的な戦争目的は、交戦国すべてが多かれ少なかれ抱いていたので、ドイツだけが悪者なのではない。

これらに対してフィッシャーやその同調者からは、以下のような再反論があった。①どう言い換えてみても、サラエボ事件直後、ドイツがオーストリアを積極的に戦争へと駆り立てた事実は動かない。②ベートマン=ホルヴェークが本来は温厚な平和愛好家であったとしても、重要ではない。問題なのは実際に彼が何をしたかであり、また平和主義者であったはずの彼が「自己の権力を維持するために、また、より悪しきものを防ぐために、我たちと一緒に運命をせざるを得なかったとするならば、その事実だけでも彼が生きていた社会を押し置くことができるのである」(フィッシャーの弟子ガイスの言葉)。③またベートマン自身がそれほど平和主義者だったかどうかも疑問は残る。彼はマルヌ会戦以後の和平交渉でもしばしば九月綱領的な、有利な条件で講和できないかと執着しており、それはベートマン失脚以後、後継宰相にも受け継がれていった。ロシア革命という敵の自滅に助けられて結ばれたブレスト=リトフスク条約にも、それは表れている。④たしかにイギリスやフランスも併合主義的な傾向を示していたが、ドイツほどに過激ではなかったし、また他国が併合主義的であったとしても、それがドイツが潔白だったという根拠にはならない。

フィッシャーの新説は、多くの反論を呼び起こした。だが、けっきょく彼の主張を全否定できるような反証は出ておらず、また、冷静に読めばフィッシャーは1914年のドイツと1939年のドイツを無条件に同一視しているわけではなく、ナチスの戦争目的にはドイツの国家主義の伝統的主張が反映され、だからこそあれほど素早く国民の多くの層の共感を得たのだと言っているに過ぎない。また反フィッシャー派の歴史学者たちも、第1次世界大戦のころからドイツの軍部が横暴になり政治を支配していったことを認めているので、感情的な対立を別として両者の間にそれほどまでの決定的な違いはないとも言える。英米などドイツ以外の国々でフィッシャー説の評価が高かったこともあって、フィッシャー理論はある程度までは定説化しつつ今日に至ったといえる。

参考文献 F・フィッシャー著、村瀬興雄訳 『世界強国への道(上・下)』岩波書店、1972/83